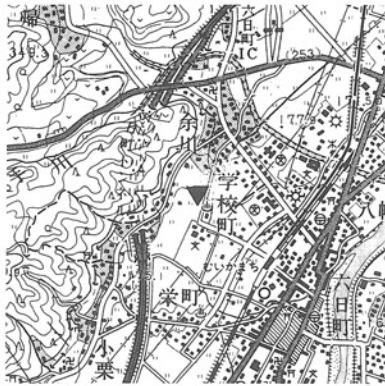


新潟・南魚沼市余川地内試掘調査地点  
みなみうおぬまし よかわ

- 1 所在地 新潟県南魚沼市(旧南魚沼郡六日町)大字余川
- 2 調査期間 二〇〇二年度調査 二〇〇二年(平14) 一二月
- 3 発掘機関 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 尾崎高宏
- 5 遺跡の種類 遺物散布地
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(十日町)

調査地点は旧余川沢川(平手川)によって形成された扇状地上、扇側と扇端の接する付近に立地する。調査地点の西側には魚沼丘陵が所在し、丘陵と扇状地の間を旧余川沢川が流れていた。この河川はもう少し下流で丘陵から流れ出た鎌倉沢川と合流していたため、雪解けの時期を中心に両河川の流水があふれ出し洪水を頻発させていた。

今回の調査も、国道一七

号六日町バイパス建設に伴う一連の試掘調査である。約七〇m離れた地点では、「田租料」と記された木簡が出土している(本誌第二四号)。両地点の比高差は約一mで、今回の出土地点の方が高い。

木簡は七八トレンチの地表下約八〇cmの砂や礫が混じる濃茶褐色シルト層から三点出土した。前回の出土層は地表下約七〇cmの腐植物が混じる暗褐色シルト層で、前回とは土層の色調が若干異なるが、シルト層という点では共通しており、また一つ下の層が両者とも砂礫層であることから、基本的に同じ土層の可能性がある。三点の木簡は約一mの範囲内で出土した。上層の腐植物層と、下層の小礫の混じる砂礫層に挟まれた土層(シルト層)からの遺物であることから推測すると、前回と同様に、自然流路の岸に近い地点か、岸付近の淀みといった湿地状況が推察される。共伴遺物としては、付近から札状木製品三点と、約二m離れた地点から伊万里焼と思われる近世陶磁器片が出土している。これ以外に木簡の時期を推測する遺物はないが、共伴遺物からみる限り、木簡は三点とも近世以降の可能性が高い。そうであるならば、前回出土し古代と推定した木簡も近世の遺物である可能性が高くなる。

8 木簡の积文・内容

(1)

□ □ □ □ □

(185)×24×3 051 第1号

(2)

「十六七八

(147)×16×3 081 第11号

(3) □

(57)×10×1 081 第四号

(1)は上端部が原形をとどめ、下端部は明瞭な刃物痕跡を見出せないが、左から右斜め下に向けて直線的に切断されているので人為的と思われる。両側面は左上端部が一部損傷を受けているが、基本的には原形を保っている。表裏ともに調整痕は見出せないが、面の滑らかさを見ると、両面とも調整がなされた可能性が高い。表面の墨痕は下端付近の二文字分だけ確認できる。それも赤外線を用いてようやく見出せる程度で残りがよくない。裏面はわずかに墨痕が点在するだけで、文字として認知できるものはない。

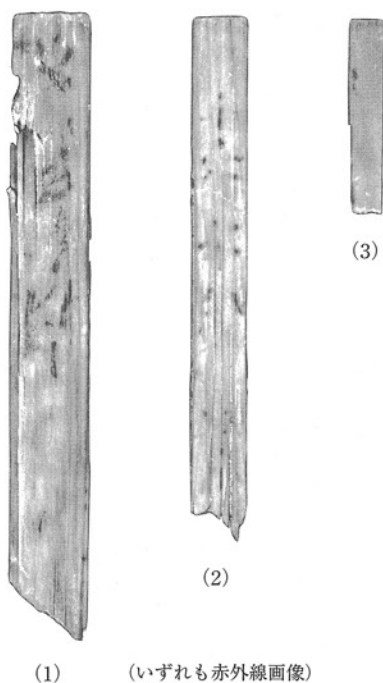
(2)は上端と側面は原形を保つが、下端は欠損する。上端より約5cmのところまで表面に向けてわずかに屈曲する(土庄などによるものと思われる)。面の滑らかさから表面には調整がされたと思われるが、裏面にはそれが見出せない。内容は数字を列挙したものであるが、それが習書によるものなのか、帳簿など記録簡に関わるものなのか、その性格は不明である。

(3)は原形をとどめているのは上端部と右側面で、左側面は縦割れしたことが観察される。文字は主に欠損部に記されていたのであろう。下端部の切断面をみると、刃物などにより意図的に切断された可能性もある。墨の残りは悪く、肉眼ではようやく見出せる程度で、赤外線を用いなければ確認は難しい。

## 9 関係文献

報 平成一五年度『二〇〇五年』  
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団『新潟県埋蔵文化財調査事業団年

(田中一穂)



(1)

(いずれも赤外線画像)

(2)

(3)